

## ㊦ 二藤部兵右衛門（にとべ・ひょうえもん）家

羽州大石田（現在の山形県北村山郡大石田町）四日町村（幕領）の大石田河岸屈指の舟持荷問屋。

初代兵右衛門は、寛文 5（1665）年生。井出楯の家老の系譜をひく。

二十歳の時に兄の庄次郎家より分家し、元禄・正徳期に船宿兼荷問屋を開業したものである。

初代兵右衛門は、享保 2（1717）年に遺産分配についての「ゆつり状」を書いているが、このときすでに「棚おろし元金」は約 3,000 両に達している。

享保期（1716 ～ 1736）における二藤部家経営の重点は、在地の生産物である紅花・青苧・米穀・雑穀・たばこ・蠟などを上方中央市場や酒田市場に出荷し、その返り荷として木綿・古手・繰綿・小間物・茶・塩・海産物などを購入し、これを在地で販売する在方荷主経営にあった。（このように往復で商売する形態を「のこぎり商い」ともいい、二藤部家の場合天保中期まで続いたと思われる。）

紅花・青苧は、楯岡・天童・山形など主に町方の仲買人を通じて集荷し、酒田湊經由北廻コースで京都・奈良など上方に廻送し、販売している。売払代金は直ちに帰り荷の仕入代金に当てられた。

宝暦・天明期（1751 ～ 1789）には、舟運機構の不安定さを背景に、有力な仲買人を置いて商品生産の波に乗りながら、明和期（1764 ～ 1772）から農民や村への貸付金を急増させ、とくに天明・寛政年間に活発な土地集積を行っている。この時期には周辺農村に支配人を置いて貸地の取次人とし、また買米にもあたらせた。支配人は小作人であると同時に村役人層の有力者であった。

紅花についていえば、例えば山形の鈴木藤七は二藤部家の前渡金によって、山形周辺の岩波・前明石・堀米・宝沢などの村々から買い集め、二藤部家の商標である ㊦（カクニ）紅花の仲買を行い、一方上方商品である繰綿・玉砂糖などの移入商品を ㊦ 商品として売り次ぐという取引形態をとっていた。

店卸元金（純資産）の動きで見ると、享保元～ 7（1716 ～ 1722）年の平均は 3,353 両で増加の一途をたどるが、享保 8 ～ 20（1723 ～ 1735）年には 1,170 両と減少し、元文 2（1737）年には近世中期における同家の資産の最低である 229 両余に減少している。元文 3（1738）年から上向きのカーブを描いていくが、なかでも宝暦・明和期以降の増加にはめざましい

ものがある。そして、明和 4 (1767) 年には享保期をしのぎ、安永期(1772 ~ 1781)に入り漸減したのであった。

天保期(1830 ~ 1844)以降、最上川を商人荷物として下す全体量は 60,000 ~ 80,000 俵余で、このうち大石田出荷高の割合は 30 ~ 40 %とみられるが、天保 5(1834)年の大石田荷主の最高出荷高は二藤部家の 1,835 俵余であった。その後は、天保 8(1837)年に 4,682 俵余で最高位 (28 %) にあり、その額は安政期(1854 ~ 1860)までほとんど変わらなかった。

紅花についてみると、安政 2(1855)年の二藤部家の出荷高は、大石田総出荷高 5,422 個 (1,300 駄余) のうち 3,126 個 (57.6 %) を占め、青苧も含めて最上特産の両品目を独占的に取り扱っていた。

しかし、文久年間以降 (1861 ~) 二藤部家の川下げ取扱い荷物は、紅花はもちろん、皆無になる。

嘉永期以降 (1848 ~) には、もっぱら上方商品の販売を主とする「店方」経営に依存し、幕末・維新时期には地主として事実上の所有地を増やしている。

明治期の二藤部家は衣類品を扱うほか、明治 8(1875)年には大石田最大の地主として約 606 俵の立附米であり、第 2 位の約 331 俵を圧倒していたが、明治 18(1885)年の地価金は 9,501 円で第 5 位、終戦直前の土地は 36.2 町で第 4 位になっている。

二藤部家は歌人斎藤茂吉とも深い関わりがある。茂吉 (当時 65 歳) は、昭和 21(1964)年 2 月から翌年 11 月まで、二藤部家の離れの二階屋「聴禽書屋 (ちょうきんしょおく)」に滞在していた。(当時の兵右衛門は、両羽銀行大石田支店に勤務。)

茂吉が滞在中に創作した 824 首の短歌を収めた第十六歌集「白き山」は、近代短歌史上最高の歌集といわれている。茂吉は「白き山」の後記にこう記している。『大石田も尾花沢もまことに好いところである。それに元禄の芭蕉を念中に有つといよいよなつかしいところである。』

鼻のこゑを夜ごとに聞きながら「聴禽書屋」にしばしば目ざむ  
しづかなる秋の光となりにけりわれの起臥せる大石田の恩

#### 参考文献

- ・「大石田町史」上, 下巻
- ・横山昭男「幕末期における河岸問屋経営の変容—羽州村山郡大石田四日町村二藤部家の場合—」
- ・今田信一「最上紅花史の研究・改訂版」
- ・「山形県史」第 2, 3 巻 ほか。